北海道医報
ISSN 0913-0217　2018.8.1. 第1199号
発行人　北海道医師会長　長瀬　清
編集人　情報広報部長　山科　賢児
発行所　北海道医師会
〒060-8627 札幌市中央区大通西6丁目
TEL (011) 231-1432　FAX (011) 221-5070
URL http://www.hokkaido.med.or.jp/
E-mail info@office.hokkaido.med.or.jp　頒価 1部 250円（税別）

節風季

北加伊道人（ほっかいどうじん）
―武四郎が愛した北の大地―

情報広報部長　山科　賢児

江戸時代、北海道は蝦夷地と呼ばれアイヌの人々が住み、北海道の一部を松前藩が統治していた。幕末から明治維新の混乱期に蝦夷地を6回探査し、日本の国土として世界に認知させた松浦武四郎の生涯が、2018年の北海道命名150年を機に脚光を浴びている。

松浦武四郎は文化15（1818）年の生まれ、今年は生誕200年の年でもある。武四郎の生家は三重県松阪市小野江町の旧伊勢街道沿いにある。公開されている生家を訪れてみると、豪華ではないが門構えは広く、裕福な家であったと想像される。生家に面する伊勢街道は、これが街道かと驚くくらいの道幅の狭さである。

文政13（1830）年に起きた社会現象「文政のおかげ参り」は、一年間に約500万人もの人々が全国からお伊勢参りにやって来たとも言われる。当時13歳の武四郎は、生家の前を行き交う人々の雑踏を街道脇から見ていたのだろうが、今は人や車の通りも少なく当時の賑わいが嘘のようである。

その旅人たちの影響を受けたのか、武四郎は17歳から26歳の間に精力的に全国の名所旧跡を訪ね、各地の山々を登り、のちに旅の巨人と呼ばれるようになる。身長150センチほどの小柄な彼のどこに日本中をくまなく踏破する体力と気力があったのかと、驚かざるを得ない。時はまさに、鎖国を続ける日本に開国と通商を求める欧米の外国船が押し寄せる時代の転換期であった。長崎滞在中、ロシアからの脅威による蝦夷地の危機を知り、武四郎の関心は蝦夷地へ向かった。

生家からほど近くにこじんまりした松浦武四郎記念館があり、「地図製作者として」「出版者として」「ルポルタージュ作家として」の多才万能の武四郎の生涯と業績が興味深く紹介されている。彼が野帳に記したメモやスケッチは驚くほど精密かつ詳細で、こまめな彼の性格の一端が垣間見える。記念館には彼を知るための十分な展示と資料が充実し、郷土の偉人である国学者の本居宣長、戦国武将の蒲生氏郷と同様に、松阪市が武四郎の偉大な業績を称えている。

展示されていたパネルの文章に衝撃を受けた。『武四郎は「アイヌ」と「シャモ」の共存を願っていた。しかし現実に武四郎が見たものは、松前藩・場所請負商人・幕府役人による「侵略・横暴・搾取・収奪・酷使・凌辱」の数々であった。武四郎の書いた膨大な日誌は地誌であるとともに、告発の書でもあった。』

明治2（1869）年5月、榎本武揚ら旧幕府軍が降伏し戊辰戦争が終わり、明治政府は7月に開拓使を設置し蝦夷地開拓に乗り出した。開拓判官に任じられた武四郎は、蝦夷地に替わる新しい名称を政府に提案した。上申書には、北加伊道を含め6案が挙げられていた。北加伊道の「加伊」が「海」に変わって「北海道」と決まったのは、律令制の行政区分五畿七道に則ったからだろうか。

「参考熱田神宮大神縁起」には「東国で暮らす人々は自らの国を加伊と呼び、アイヌはお互いをカイノー呼び合う」と記されている。「北加伊道」とは、「北にあるアイヌの人々が暮らす大地である」という先住の民であるアイヌ民族への思いを込めて考えられたものであった。北海道と命名される前から、「北の海の世捨て人」の意味を持つ「北海道人」を、武四郎は雅号として使っていた。北海道の名称の決定を、彼はどのような思いで聞いたのであろうか。

巡回展「幕末維新を生きた旅の巨人松浦武四郎」が、北海道博物館で開催中である。それに関連して松浦武四郎記念館の主任学芸員で「幕末の探検家　松浦武四郎入門」を著した山本命氏による講演会「武四郎の道は未来へと続く」を、蝦夷梅雨のなか聞いてきた。「武四郎は、日本の国土として北海道を守ろうとしただけでなく、アイヌの人々の命と文化を守ろうとした」と話されていたのが耳に残る。

「北海道開拓の歴史というと、近代化に向けて華々しく発展していく様子に目が行きがちだが、その裏側には政府の政策によって古くから住んでいた土地を奪われ、独自の文化を否定され、民族の尊厳を傷つけられていったアイヌの人々の辛苦があった」とも山本氏は著している。

武四郎は52歳で北海道開拓使判官の地位に就いたが、北海道勤務をすることなく職を辞している。未踏の北海道を6回も探査し、寝食をともにしたアイヌの人々との交友を大切にしていたのに、なぜか41歳の蝦夷地探査を最後に生涯再び北海道を訪れることはなかった。

明治維新以降北海道の開拓が進み、アイヌの人々が住みづらくなったことへの無力感や無念さが、彼になかったはずはない。真摯で正義感の強い「北海道人」武四郎は、北海道がアイヌの人々への共感と心遣いを表す「北加伊道」であるのを望んでいたのだろう。晩年になっても彼の旅への情熱は衰えず、毎年旅を続けた。北海道と同じ未踏の地、三重県大台ケ原を探査し、亡くなる前年の70歳に富士山登頂もしている。それならば、「武四郎、なぜもう一度北を目指さなかったか」と、問いかけたい衝動に駆られるのである。